

## 『ジオグラフィカ千里』第2号発刊に際して

2019年3月に創設された千里地理学会の機関誌として第1号を2019年11月に関西大学千里山キャンパスで開催された2019年人文地理学会大会にあわせるかたちで刊行した。この学会は毎年12月上旬の土曜日に開催してきた関西大学地理学研究会を発展的に再編したものである。その第2号を2年半後のいまここに刊行する。

それまでの経緯を少し長くなるが記しておきたい。千里地理学会の構成員は現職の専任教員や学部生、大学院生、卒業生、それに退職された専任教員、本学にご出講いただいている非常勤講師の先生などである。ただし、現在のところ年会費は徴収していないし、きっちりとした学会規程なども考慮中という、きわめてゆるい組織である。昨年12月11日に2021年の第3回千里地理学会を開催した折、地理学同窓会総会を学会終了後に開催した。

その議論のなかで、同窓会、学会、研究会の3つが並存する複雑さを解消するために、同窓会組織は「関大地理同窓会」、学会は「千里地理学会」とすることが承認された。これまで研究会の会長は1976年卒業の渡邊登氏にお願いしてきたが、この機会に、1979年度卒業の三好唯義氏への交替案が可決された。氏は長く神戸市立博物館に勤務、地図史の専門家としても著名である。

いっぽう、千里地理学会の方は、教室に現職の専任教員が中心となることとなり、会長は年長の野間が引き続きすることになった。そのため、今回の号の編集は、送付事務や原稿受付などを松井幸一准教授が担当し、編集の最後は野間が行った。

この3年間で専修の教員スタッフは大きく変わった。2019年3月に伊東理教授を68歳で送り出し、翌20年3月には木庭元晴教授を70歳定年で見送った。その後任として、都市地理学が専門の土屋純教授を宮城女学院大学から19年4月に迎える。

さらに、20年4月には福岡教育大学から自然地理学が専門の黒木貴一教授を迎えた。また、松井幸一准教授は、21年度に1年間、関西大学学術研究員として、ヨーロッパや東南アジアで研修予定であった。ただ、20年の年初から世界を席卷した新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、彼の外遊も10月から3か月ベルギーを中心にした縮小した研修というかたちでの変更を余儀なくされた。

世界中がコロナ禍の異常な状態が断続的に続き、教室運営も学生指導もこれまでの常識が通じないなかでの暗中模索であった。この第2号は、本来は木庭先生のご退職に合わせての刊行を考えていた。そのため、声をかけた執筆者には、木庭先生ゆかりの自然地理学やその周辺分野の卒業生が多かった。しかし原稿の集まり具合が芳しくなく、20年3月の刊行を断念し、他の分野の卒業生などに声をかけ、さらに新任のお二人の専任教員にも寄稿いただいて、なんとか体を整えることができた。

今回の雑誌の構成は、前半部に特集としての自然地理学分野の論考を配し、後半部

はそれ以外の人文地理学の論考を並べる2部仕立てとなった。木庭先生の関心のひとつが、遺物・遺跡の年代測定にあり、考古学との接点にも関心が深いので、第1部の最初の3編はその方向に沿ったものとなっている。

表紙デザインや判形や書式などは第1号を踏襲している。B5判1段組であるが、学術誌の国際化、オープンアクセス化が第1号刊行時よりもさらに進展していることに鑑み、将来的な冊子体の刊行ではなく、デジタル媒体でのフリーアクセスの電子ジャーナルをめざすことを考えている。そのため、今回の冊子体は100部しか印刷しなかった。刊行後、デジタルデータを関西大学図書館に渡して、関西大学学術リポジトリに搭載することで、世界中、どこからでもアクセスが可能で、全文の閲覧のみならず、ダウンロードも無料でできるようになるはずである。

すでに第1号もそのような所作によって、邦文要旨、英文要旨、日英キーワードもついているので、書誌情報の上では世界標準となっている。今後もこの方式を踏襲し、最終的にはデジタル媒体のみの刊行も視野にはある。ただ一気にはわれわれのような小規模教室では無理なので、今後も試行錯誤しながら、よりよき学術雑誌をめざして改良を進める所存である。

最大の問題は雑誌刊行費用の捻出である。学会組織となっていない *Nature* や *Science* などの高名な国際ジャーナルはみな高額の記事審査料や掲載料を徴収している。そんなことはわが学会ではとてもできないが、やはり投稿者には相応の負担は利益供与の面からも必要となる。それでも足りない。不定期刊行のため、年会費の徴収もなかなか難しいのが現状である。

そんな苦境のなか、地理の卒業生で、現在、ノエビアホールディングスの代表をされている大倉俊氏（1988年卒業）から、今回、高額のご寄付の打診が教室にあった。これを専任教員や卒業生有志で相談して、指定寄付というかたちで、関西大学にいったん納入いただき、そこから現役学生、卒業生のために有効に使わせていただくことにした。そのため、この寄付金の管理は関西大学の事務局になっている。

その用途の最重点支出がこの『ジオグラフィカ千里』の刊行である。次回、第3号の刊行は野間が退職する2024年3月を予定している。将来的には、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が運営する電子ジャーナルの無料公開システム J-Stage への掲載を念頭におきたい。

小さな教室から発信する地味な雑誌ではあるが、その理念は、地理学・地域環境学の醍醐味の一端をグローバルに発信することと大きい。大学院生や若手・中堅の研究者、教育現場、一般社会で地理学を活かそうとしている卒業生の励みになるようシーズ（種子）とならんことを切に願うしだいである。

2022年3月吉日

関西大学文学部地理学・地域環境学教室

千里地理学会を代表して

野間 晴雄